

キャラクター名	プレイヤー名
クリステラ・サン・クリセラム	

メインクラス	アコライト	Lv.1:		レベル	4
サポートクラス	セージ	Lv.1:	セージ	性別	女
称号クラス				年齢	47 (外見:26)
種族	エルダナーン			境遇	裏切り
出自 (効果)	商人			目標	正義

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	10	8	8	15	7	19	7
ボーナス	3	2	2	5	2	6	2
クラス修正	0	1	0	2	1	1	1
他修正							
能力値	3	3	2	7	3	7	3

HP	45
MP	63
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手									
左手	ファインシールド		0	0	0	6	0	-1	0
頭部	ビレッタ					2			
胴部	レザージャケット					4			-1
補助									
装身具	聖印								
	<b>能力値</b>		3	0	2	0	7	5	8
スキル									
その他									
	<b>総計(右)</b>		3	0					
	<b>総計(左)</b>		3	0	2	12	7	4	7
	<b>総計(両)</b>								m
	<b>ダイス数</b>		2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	3			3	+ 2 d
トラップ解除	3			3	+ 2 d
危険感知	3			3	+ 2 d
エネミー識別	7			7	+ 2 d
アイテム鑑定	7			7	+ 2 d
魔術判定	7			7	+ 2 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定	3			3	+ d

所持品	
バックパック	HPポーション*1
冒険者セット	未完成資料メモ
小道具入れ	にく*3
ポーションホルダー	
ベルトポーチ	
ランチボックス	
MPポーション*12	
毒消し*4	
野菜*0	
ハイMPポーション*2	
滑剤瓶	

現在重量:	17	所持金:	2373	預金・借金:	
最大重量:	17				

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
フォティテュード	★	-	パッシヴ	-	-	-		
効果:	作成時に精神基本値+3							
プロテクション	5	3	DR直後	20m	単体	自動成功	1/MP	
効果:	対象が受ける予定のダメージに-[SLd]							
ヒール	1	4	メジャー	20m	単体	魔術	-	
効果:	対象のHPを[3D+CL×3]回復							
エフィシエント	5	-	パッシヴ	-	自身	-	5	
効果:	効果をダイスで求める魔術スキルの効果に+[SL×2]							
エンサイクロペディア	1	-	セットアップ	-	自身	自動成功	-	
効果:	エネミー識別をセットアッププロセスで使用可							
アフェクション	1	-	DR直後	20m	単体	自動成功	シナリオ1回	
効果:	ダメージを0に変更							
クイックヒール	1	5	イニシアチブ		自身	自動成功	シーン1回	
効果:	ヒールと同時使用でイニシアチブプロセスに使用可能							
ファーストエイド	★							
効果:	難易度10の器用判定に成功すると戦闘不能のキャラをHP1(行動済み)で蘇生する							
ブラフ	1							
効果:	嘘やはったりの【精神】判定+1D							
モンスターロア	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果:	エネミー識別判定+1d							
フェイス:アエマ	1		パッシヴ		自身			
効果:	HPやMPを回復するスキル、アイテムの効果+2							
インサイト	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果:	嘘やはったりを見抜く【精神】判定+1D							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

「正直者の貴方には、泉の女神の加護があることでしょう！」

出生時の名前はアレクシア・アルケーケンジー。出身はエルーラン王国、ログレス。父アルバートと母ファイザリスの間に生まれる。

書斎で仕事をする父の背中を見て彼女は育った。一日中出かけていたかと思えば、部屋にこもって難解そうな文章を書く。仕上がった書類を愛おしそうに撫で、鍵付きの棚にしまい込む。彼女はその瞬間を見るのが楽しみだった。それをすると父は大きく伸びをして書斎を出て行って、食卓や居間で詩を吟じたり、なぞなぞを出したりして遊んでくれるとわかっていたからだ。

アルケーケンジー一家の本来は、一山いくらの弱小貴族であった。資金繰りは悪く、利息の返済にも事欠く始末だった。しかし父アルバートの代になって状況は一変。その手腕で債務を返済するどころか、財産家として台頭し始める。没落貴族の中興の祖と新聞からもてはやされる一方で、金のためにあくせく働く様はまるで商人と彼らを蔑むものも貴族の中にはいた。しかし家族と使用人の生活のために努力を惜しまない両親は、娘にとっては間違いない英雄であった。

夫妻は娘の教育に金を惜しまなかった。神殿より派遣された家庭教師に幼くから学び、そこでアエマ信仰に目覚める。やがて自らも神殿に通うようになり、神聖魔術を極めるため、ログレスでも指折りの教育機関に学んだ。家庭も学費も成績も、妨げるものは何もない。まさに将来を嘱望されたエリートの卵である……はずだった。あの日までは。

ある日、父親の書斎に忍び込んだとき。彼の不注意からか、書きかけの書類が机の上に広がっているのをアレクシアは見つけた。母親譲りの好奇心を、彼女は抑えられなかった。明らかに共通語でないところか、彼女の知るどんな言語にも似ていない。恐らく暗号だろう。父の忘れていった、とびっきりななぞなぞ。親と本気で遊ぶこともなくなって久しい彼女は、それを密かに写し、自室へ持ち込んだ。頻度分析。隣り合う文字。謎めいた記号の羅列にも、かならずパターンがある。同じような隙を伺って作った複写は、徐々に増えていった。